

毎日歌壇

水原 紫苑 選

横長の瞳孔をすり寄せてくる羊 涙の止まらぬ僕に
甲府市 村田 一広

△評▽なぜ「羊」で、なぜ「横長」なのか、なぜ涙が止まらないのか。全く説明はないが、現実を超えたリアリティーがある。

錆びながらかかやきながら十月の屋根に磔なる風見鶏
加古川市 石村 まい

△評▽風見鶏は十字架の上において、悪魔を追い払っているのだから違はずだが。

それもいい、なんて言うとききみの目が猪苗代湖だったと知っていた 横浜市 永永 キヌ

冬の陽はまなざしに似て折り紙をたたむわたしを見つめる母の 大阪 中村 杏

ビスケット分け合つたあと駅前鳩はしづかにひかりへ還る 見附市 有村 桔梗

目覚めても目覚めても夢 液晶にどこへも降り立てない鳥がいる 東京 境 千尋

ダム底の探譜を続けて死後にしか死後のことは分からないから 豊橋市 太田 貴大

逆光という語のふしぎ帰路なんて持たないことが光のすべて 東京 石川 真琴

この宇宙実はず子宮の中でしてみんなもれなく生命未滿 神戸市 入間しゅか

この器からわたしが尽きそうになり色のない世界の端にしゃがむ 四万十市 佐竹 紫円

伊藤 一彦 選

尻もちをついてたちまち赤ん坊 四つん這いしてようよう起きぬ 札幌市 佐々木さと子

△評▽高齢者は転びやすく、その後なかなか起き上がれない。明るく詠まれているが、リアルでシリアスな歌として印象に残る。

雨上がりの公園ではしゃぐ子どもたち靴に雫のシールをつけて 相模原市 榎本 ハナ

△評▽雨上がり待っていた元気な子どもたち。雫のシールがユニークで楽しい。

お手本のような銀杏の絨毯は二輪車が滑りやすくてこわい 東京 藤沢 静二

新聞は休刊日だと知ってるがポストの空を確かめにくい 金沢市 竹内 一二

予報士の背景の空がうつつ私に見える窓に等しい 東京 八重樫知宏

母親を亡くした子熊が冬眠を知らずに生きるこの冬憂う 横浜市 豊田 迪子

撃たざるをえぬ吾なれば祈りつつ撃つもう里に下りてくるなど 秋田 三浦 政博

スタートをした瞬間に弱音吐くいつも競馬に負ける人は 神戸市 北村 行生

子ども産み育てていたら治ったと思われていた心の病 奈良市 久保 祐子

古もあまたの人が渡り来ぬ国あらざれば内外もなく 江別市 海老澤 基

米川千嘉子 選

野路菊の蕾にそよと秋の風大屋根リングは歩けないまま 奈良 島 眞澄

△評▽10月に閉幕した大阪・関西万博。大きなリングとは対照的な極小の円をなして野路菊が咲き始めるのはその後、晩秋だ。

二輪車のようにくっつき一日を認知症の夫を扶けています 東京 河野多香子

△評▽一本の茎に二つの花が咲く二輪草。そんなかんじな愛情が無いわけではないが。

やっと来てすぐに帰ってしまう秋 息子は秋だ切ない風だ 会津若松市 ともりゆめ

あかまんま手にゆき過ぐる人ありてその皺の手もままだとしにけむ 東京 浅倉 修

日本人ひとりに一本日傘持つ陰り求めて木の子のように 小平市 真鍋 真悟

無事手術終わりましたと伝へ来し看護師の頬夕日に赤し 米子市 永田富基子

市役所に住民票を取りに来たようにふるまう子を連れた熊 さいたま市 望月 裕子

「お寿司でもころろかね」と義母さんは施設に臥せるに屋敷の心配 千曲市 中村 美樹

あふるほどやさしいことばあるものをかなしいことばまんえんのせかい 伊丹市 岡本 信子

金えのころ紫えのころえのころ草見分けつつゆく九キ口疲れず 鶴岡市 大沼 葉子

加藤 治郎 選

一夜昔 黒のドレスが溶けていくあなたの腕に抱かれたならば 春日井市 月夜の雨

△評▽前衛的な短歌である。「一夜昔」はメタファーだ。成熟して傘の縁から黒く液化して溶けてしまう。深い性愛を歌った。

月隠す雲が彩雲として光る君には君の優しさがある 東京 畑 えな

△評▽月光彩雲だ。月の周りの雲が虹色に輝く。上旬は比喩だ。君への愛の歌である。

分校の友が住んでる町のこと文をしたたむ鈴懸の下 川崎市 新井 将

叶うならクレオパトラの妹の方に会いたいエフェスの遺跡 船橋市 藤本 典裕

どんぐりに顔を描いては秋深い木漏れ日の跡病む手にのせる 兵庫 廣澤 真希

浮き輪のね空気を抜いて八つにね畳んだときに夏が終わった 京都市 上原 良美

むずかしいことは分からね ドーナツの穴は残して食べる派である 大津市 世田 夏雪

金星人の納骨堂を地球ではフィルムアーカイブとよんでいる 大野城市 野分 のわ

遠く住む父宛七歳のわが手紙朱に染められて返されたりき 米 国 森本 弘

恋をなくした朝には秋のソーダ水 青く輝く夏の思い出 岐阜市 山上 秋恵

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます